

梯

佐野 渡理 雲火八 津橋 第八篇

乃水考水

法々々々

舞角書

安門金貞

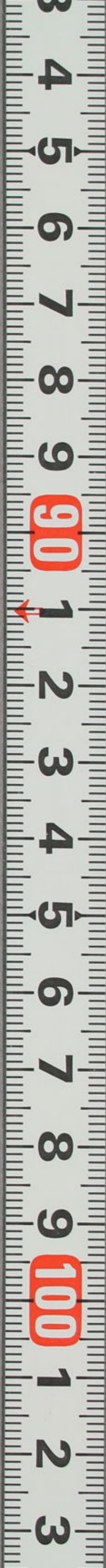
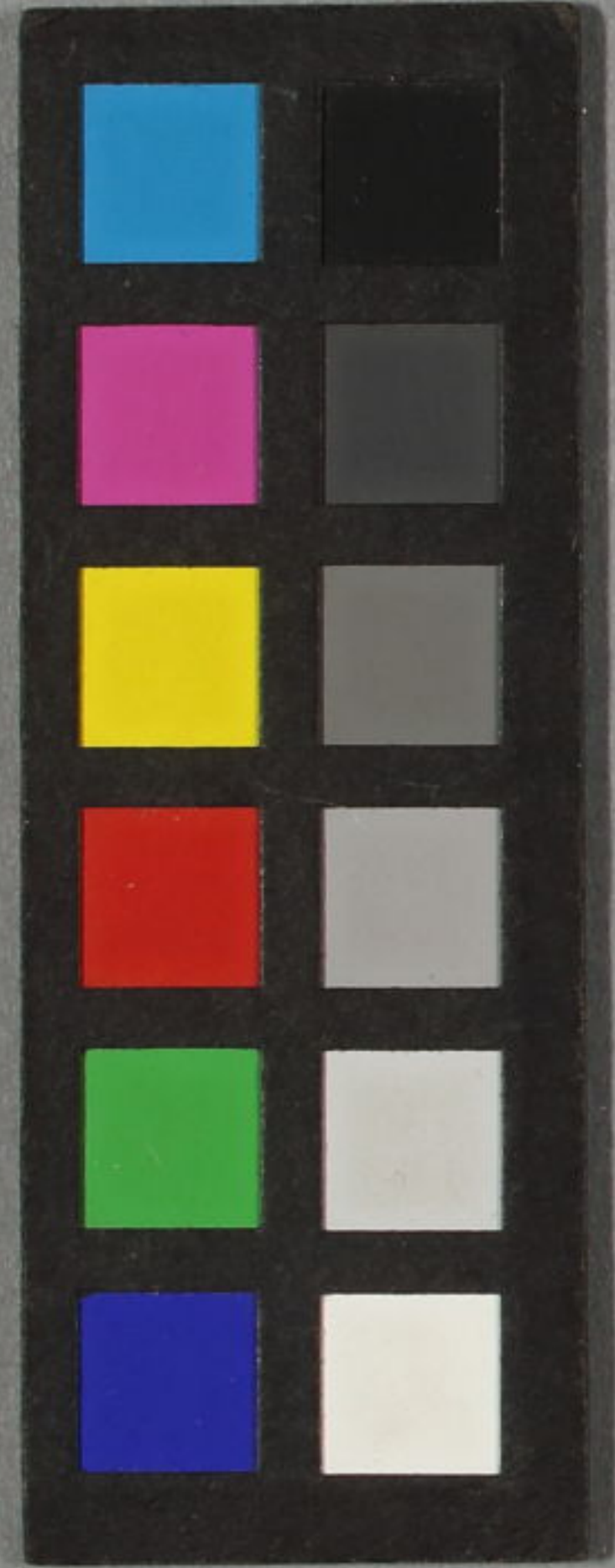
ああ

田員山

新筆



~ 13
3745
8





僕わが這こ不あ案えと疑うく稿本既こ不あ央まある頃ころ或人未まりて閱けく。當編中とうへんちゆうやう白妙狐あきらめきつがの奮きん恩おんを報むかへる條じょうの念ねんもあふと憶おもひ。多おほくとも通つう力りき自在じざいの老狐らうこを首くび千枝せんしが茨あざ枝えだ不ふ討うちると不ふ助すける。然しかし其その弓ゆみが二ふた汗あせ山やまあり。庶しよ沼ぬまの為ために謀まらむ折せ力をそむる。このるる尚なほ信しんすまてあつ至いたるまを緯いとの乱みだれとありこの那な通つう力りきが申まをはまの老狐らうこの始はじめ終はつしゆ心こころが。と此こゝを打うちて。臆おそむを客きやくの見み識ししと。と人ひとの宿しゆく業ごうあり天命てんめい道みち。あつて企きむらふんまの果はつ敢かんるは仮かり字じ策さく子し理り外がいの理りもて綴つづらる。一部いちぶの趣すい向かうと。斯しかくは條じょうの這こ卷まきの他ほかもかゝる。在ある。鳴なんくくと水みづ入いの。水みづの限かぎりと掉おちし。と。昏あま。

万延二辛酉年孟陽發市

鳥永春水

一 喬

門 13
號 3745
卷 8



白狐

雛
鶴



真
弓
春之助
世



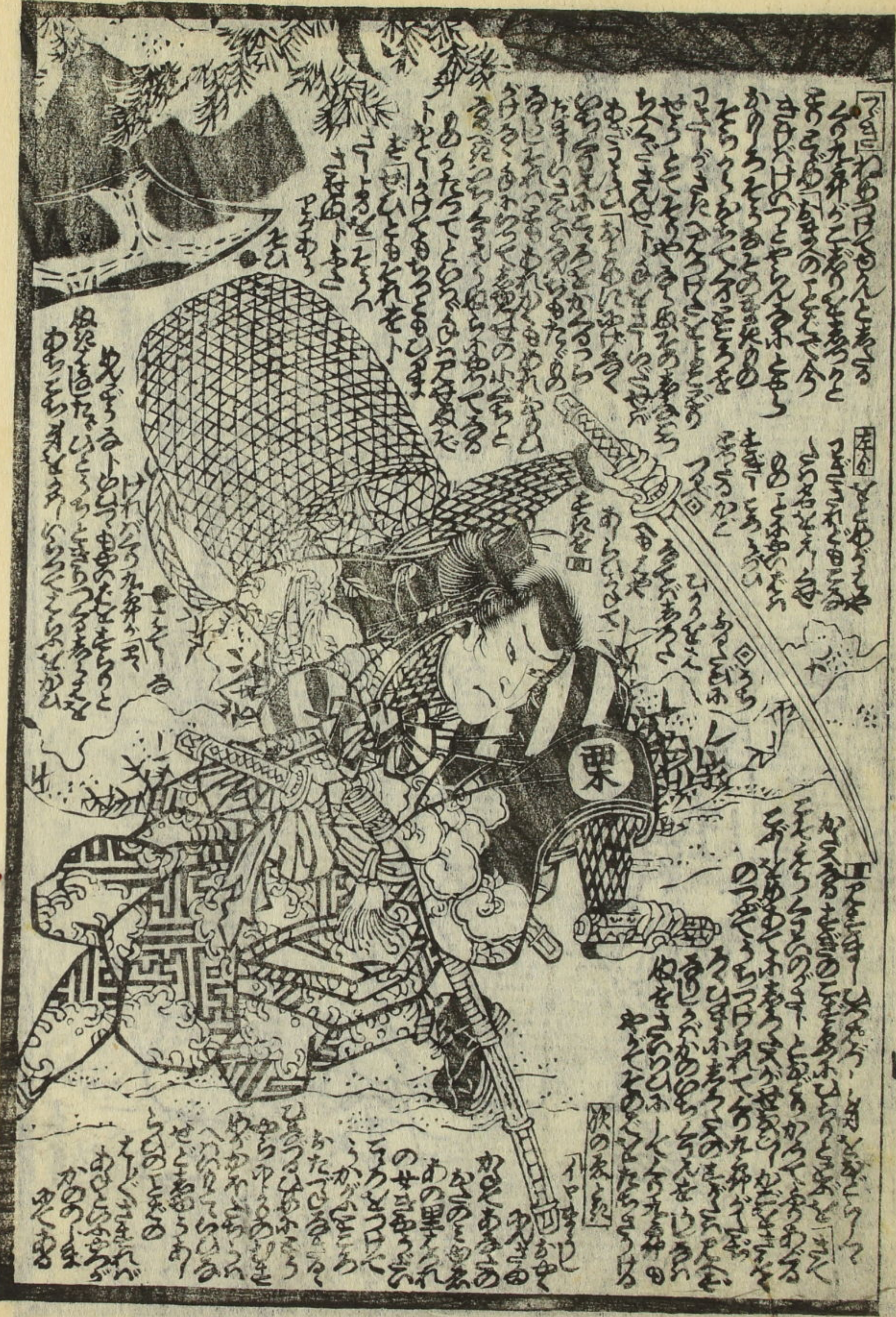
佐野の
次郎左門



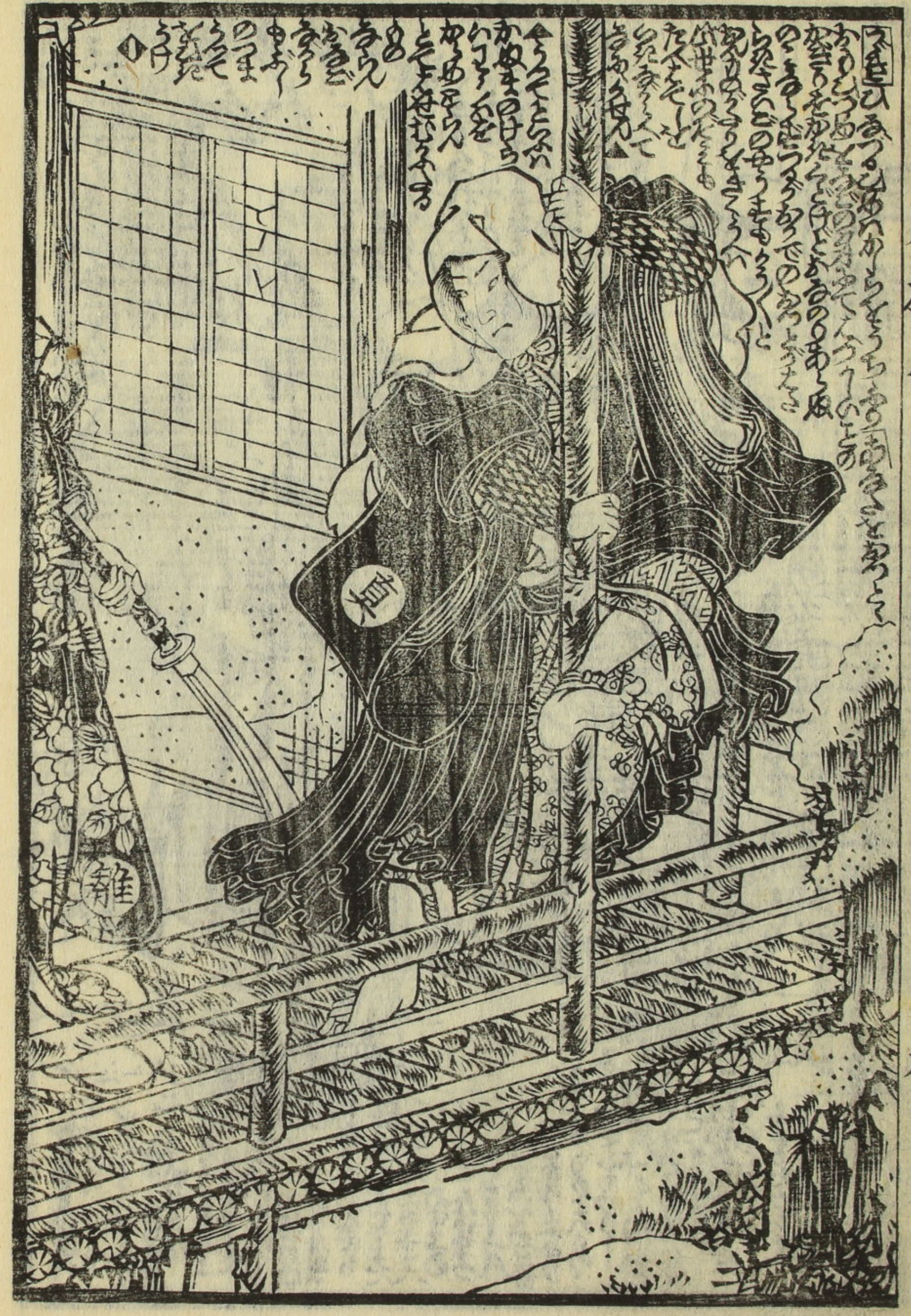
八橋
傾城

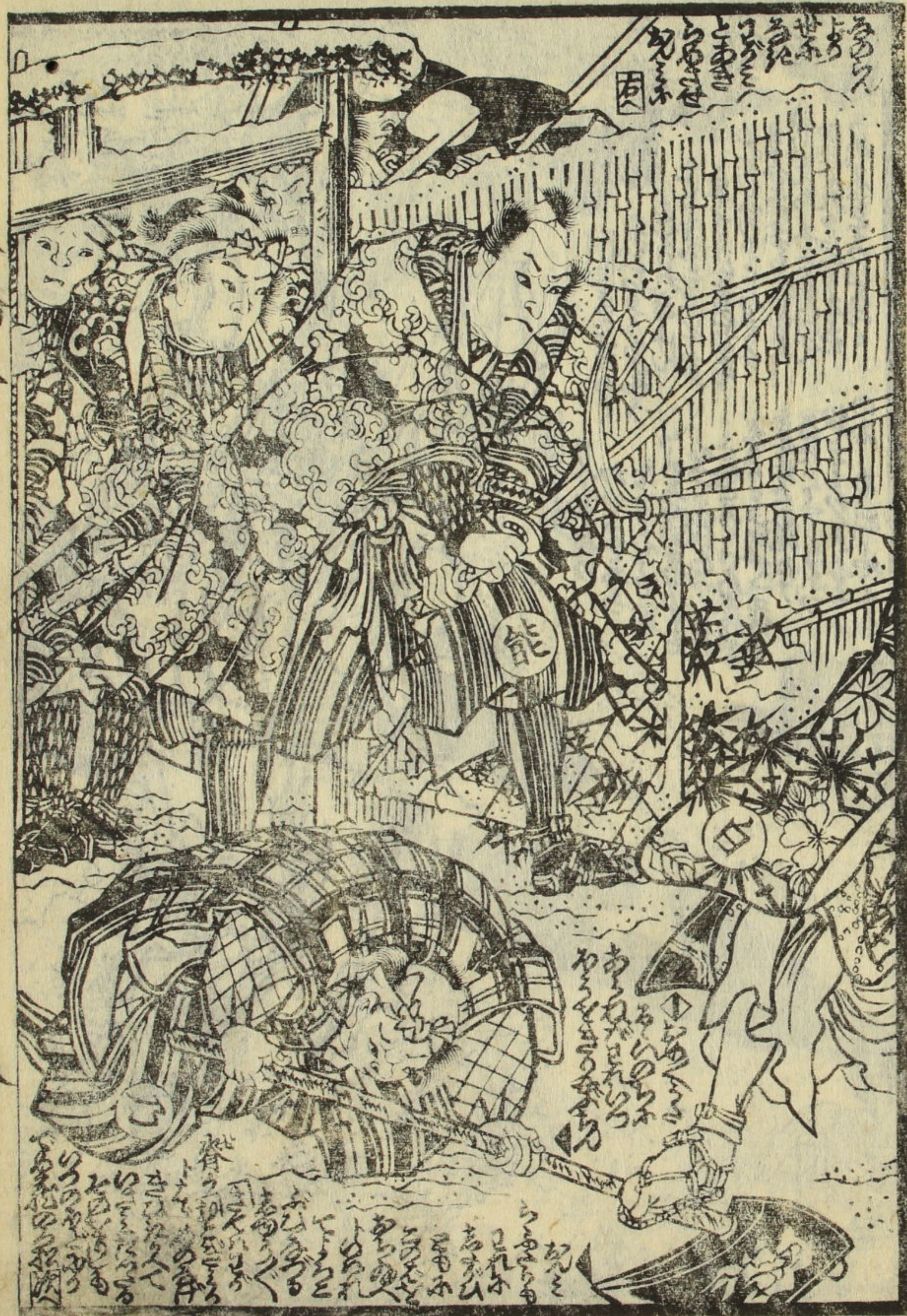
守口
刑部

八橋











あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ

あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ

あつたはらへりて

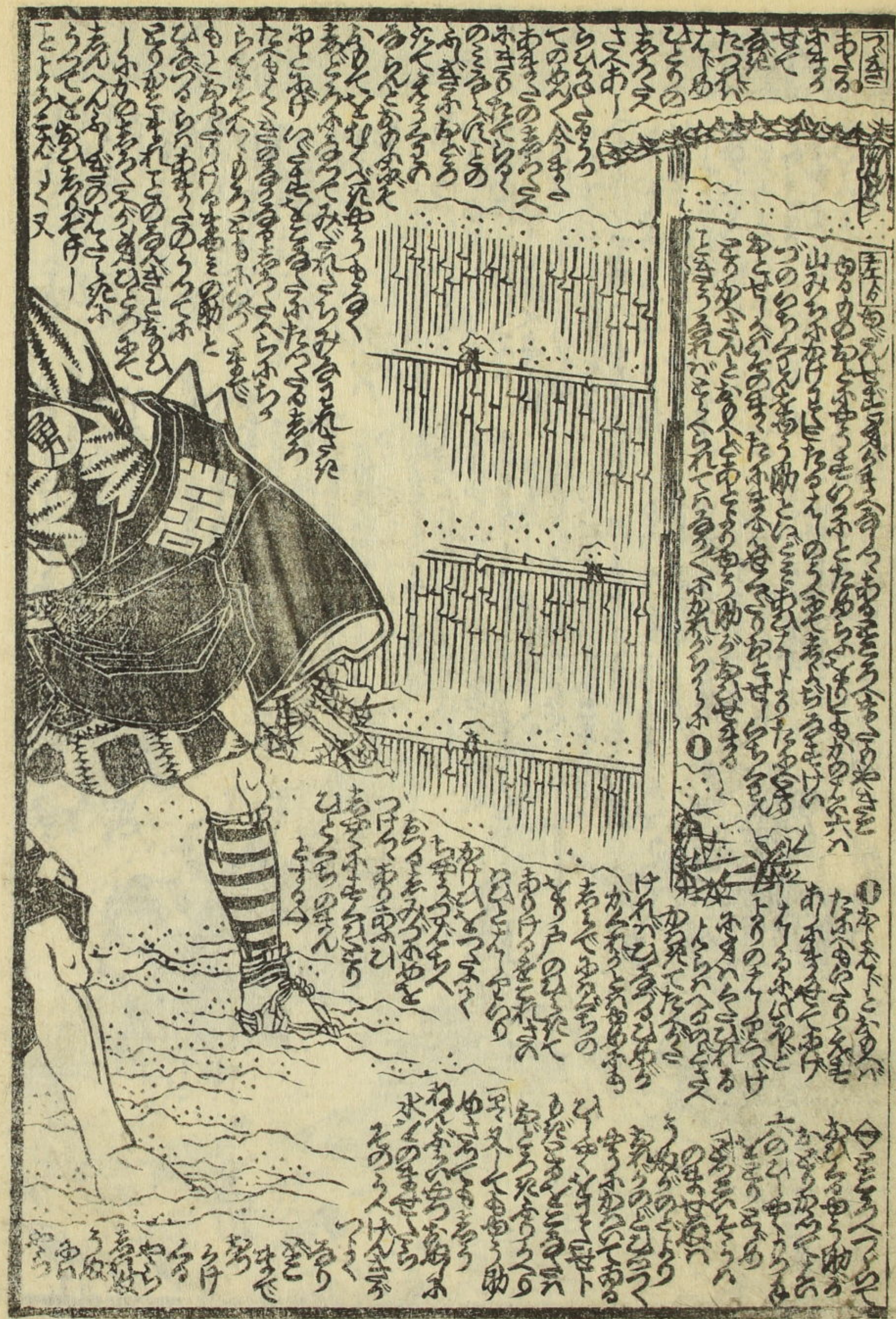
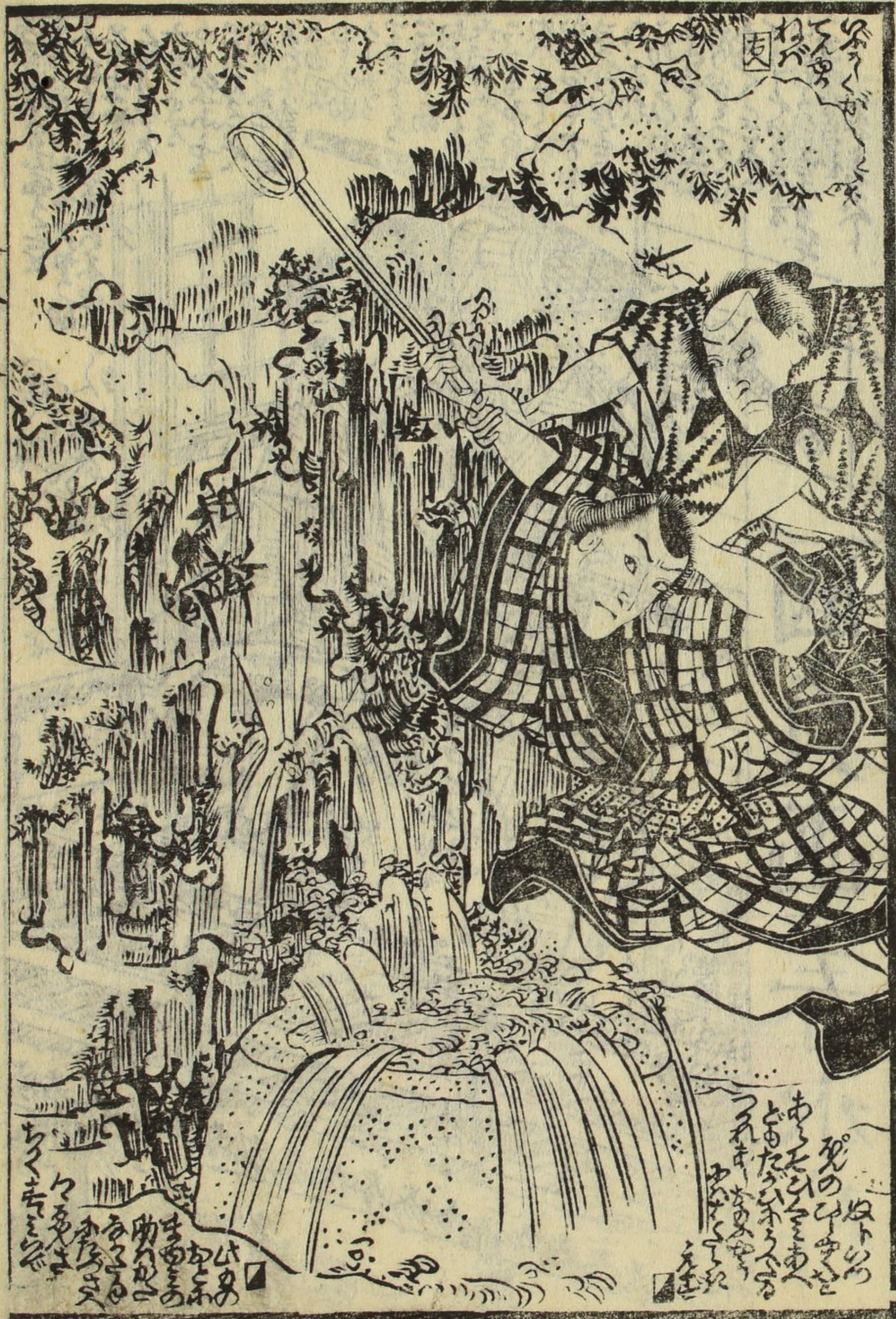
あつたはらへりて

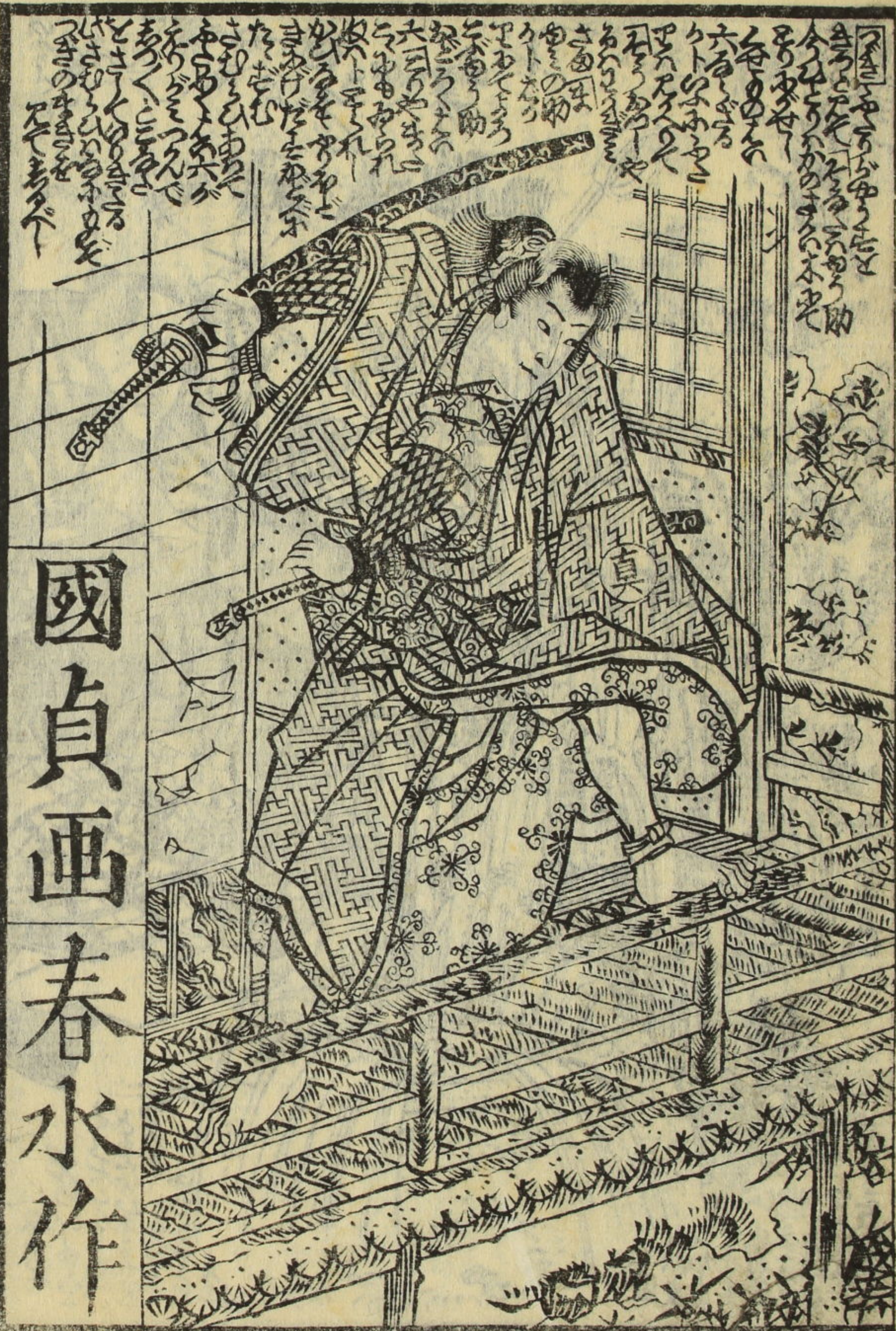


あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ

あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ

あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ
あつたはらへりて
なほまらぬまらぬ





國貞画春水作

八景



依妙の海行

雪の如く揚

ぬおき春水作

今月玉貞名

上の巻

あまのくさ梓

志ん画



下

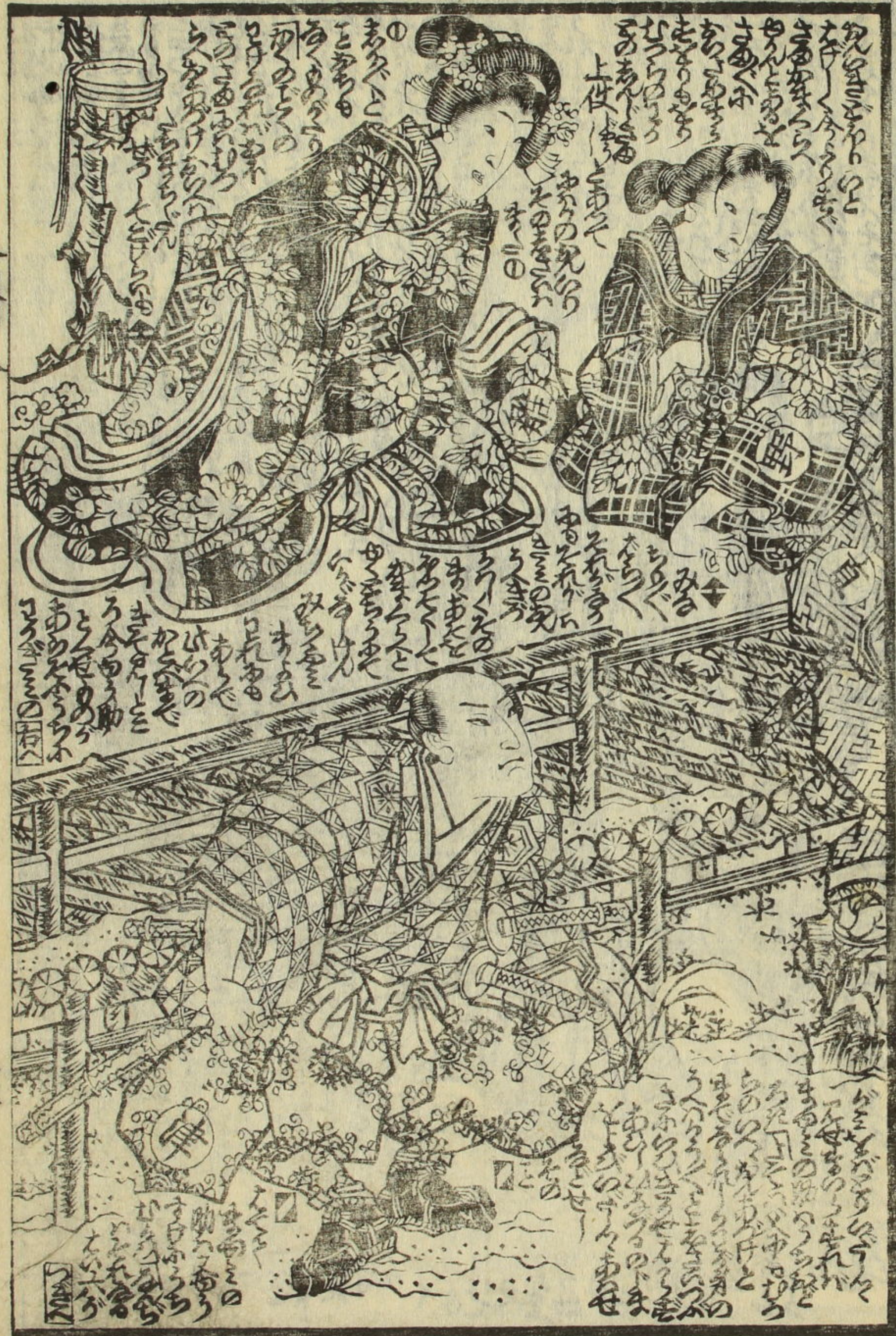
歌川國貞画

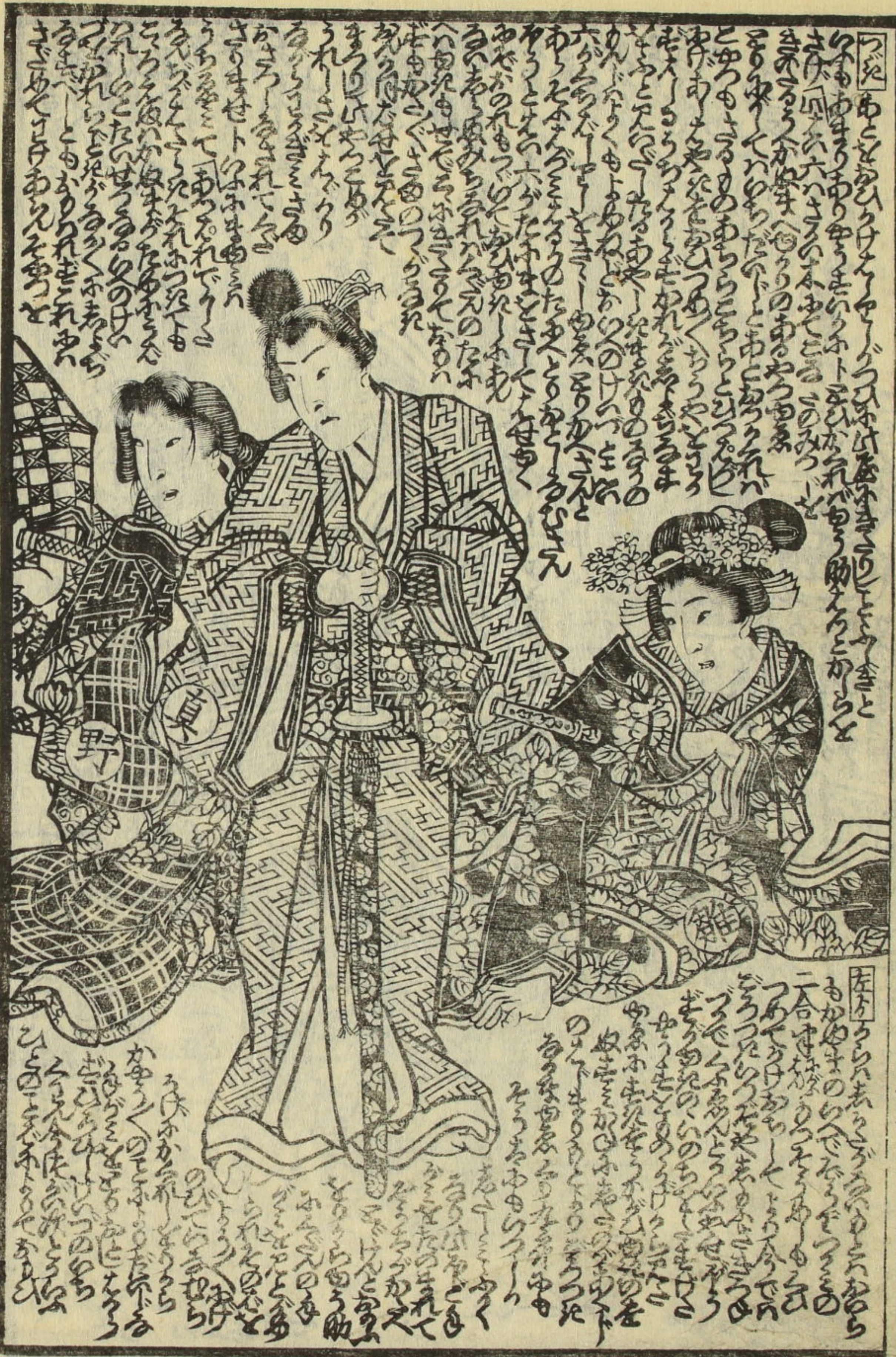
為永春水作

兩國
松壽
梓堂

佐野渡雲八橋八鏡

上





Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a play script or commentary, surrounding the illustration on the left page.



Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a play script or commentary, surrounding the illustration on the right page.



